

# 第 91 回上智大学哲学会大会のお知らせ

日時：2019 年 10 月 27 日（日）10：00～16：45

会場：上智大学四谷キャンパス 7 号館 14 階特別会議室

※参加無料・事前申込不要

## ★プログラム

### I 研究発表 10：00～12：10

- 飯塚萌（本学文学研究科博士前期課程）  
西谷啓治「空と即」における回互的關係と image の位置づけ
- 内藤慧（東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程）  
ドゥルーズ『感覚の論理学』における「器官なき身体」概念を巡る考察
- 青木眞澄（京都大学文学研究科哲学専修博士後期課程）  
ヒューム道徳論における規範的心理学

### II 総会 12：10～12：25

——休憩——

### III シンポジウム 13：30～16：45（途中休憩 15 分を含む）

- レトリックと哲学  
提題者：宮崎文典（埼玉大学教育学部准教授・本学哲学科元非常勤講師）  
桑原俊介（本学哲学科助教）  
持地秀紀（本学哲学研究科博士後期課程）  
司会：荻野弘之（本学哲学科教授）

### IV 懇親会 17：15～19：15

会場：上智大学 7 号館 3 階哲学科共用室・哲学研究室

会費：500 円（持ち込み歓迎）

※より多くの方に気軽に懇親会に参加していただけるよう、会費を大幅に下げております。どうぞふるってご参加ください。

問い合わせ：上智大学哲学会事務局

TEL: 03-3238-3806

Email: sophia.philosophy.society@gmail.com

## ☆シンポジウム：レトリックと哲学

荻野弘之（本学哲学科教授）

レトリック（ars rhetorica）とは対人的な説得を目指した、話し言葉（雄弁）と書き言葉（修辞）とにまたがる言語活動であり、またその技術的洗練でもあるから、人間が言葉をもって生活する限りで常に関わっているとも言える。とりわけ古代にはギリシアの民主政、ローマの共和政のもとで発達を遂げて古典的完成に達し、中世には自由七学芸の一つとして大学教育の基礎部分（trivium）を構成してきた。

今回のシンポジウムでは、西洋哲学史を通じて時折顔を覗かせるこの言語活動の諸相を切口にして、競合、対決、融和を含めて哲学との関わりを考察し、哲学という学問のあり方を歴史的に、また将来への課題として、考えてみたい。「この両者に何の関係があるの？」と訝る方も、その無意識の陥穽にこそ、重要な問題が隠れている事態に気づくだろう。

## ☆シンポジウム 提題要旨

### 古代ギリシアの弁論術・政治・哲学——ペリクレスの弁論とプラトン『ゴルギアス』

宮崎文典（埼玉大学教育学部准教授・本学哲学科元非常勤講師）

古代ギリシアの弁論術は広く法廷や議会などで人々を説得するために用いられ、その点で弁論術には政治術としての側面がある。またこの場合、弁論家は政治家にあたり、たとえばアテネ民主政を代表する政治家ペリクレスは弁論家として名高く、トゥキュディデス『歴史』は彼の弁論を伝えている。プラトンの作品『ゴルギアス』で展開される弁論術批判も、こうした政治術としての弁論術と哲学の対決として捉えられる。本提題では、『ゴルギアス』における弁論術批判とトゥキュディデス『歴史』が伝えるペリクレスの弁論（本提題では『歴史』2. 35-46「戦没者追悼演説」および2. 60-64「ペリクレス最後の演説」をとりあげる）を照らし合わせ、『ゴルギアス』における弁論術批判を、ペリクレスの弁論に表れているアテネ帝国主義、およびそのなかでの哲学の位置づけに対するプラトンの挑戦として捉え直す。

トゥキュディデスによれば、ペリクレスは民衆におもねることなく民衆を導き、ポリスを最も大きくした第一人者である（『歴史』2. 65）。ところが、プラトンはトゥキュディデスによるこうしたペリクレス評を覆し、むしろペリクレスのことを、ポリスの欲望に奉仕する召使と評している（『ゴルギアス』517b-519b）。プラトンのペリクレス批判は、ペリクレスが「ポリスを最も大きくした」ことの内実に向けられたものである。ペリクレスの弁論が称揚する偉大なアテネとは、武力によって他国を支配する帝国としてのアテネであり、ペリクレスはこれを僭主制になぞらえている（『歴史』2. 63. 2）。プラトンからみれば、このような意味でのポリスの拡大は正義や節制を無視したものにすぎず、こうした帝国としてのアテネに価値を置くペリクレスの弁論は、祖国の不正を弁護する無益な弁論術（cf.『ゴルギアス』480b）にほかならない。

さらに、ペリクレスの弁論は、ポリスあるいは人間の生き方のなかでの哲学の位置に関する重要な問題を孕んでいるように思われる。『ゴルギアス』の対話者カリクレスは、「自然の正義」説を唱え、弱者を支配する強者（一国内では政治家や権力者、国家間においては大国）を称揚する一方で、哲学については「教養のための範囲内」（485a4）でしか価値のない、国政に関与し行動に出るにあたっては無用なものとみなす。ペリクレスの弁論のなかで言われる「われわれは知を愛するが柔弱にはならない」（『歴史』2. 40. 1）という言葉は、カリクレスのこうした主張に通じる考えを内包しているように思われる。だとすれ

ば、ペリクレスを含む現実の政治家たちではなくソクラテスこそが国事（政治）を実践しているのだ（521e）とする『ゴルギアス』の議論は、ペリクレスの弁論が含意する国事（政治）と哲学の関係性を否定し組み替えようとするものといえよう。

本提題では、以上のことを明らかにすることを試みる。

\*

レトリカル・ディアレクティック

## 弁論術的弁証術

——ルネサンスにおける弁論術と弁証術の統合とその歴史的な位置づけ

桑原俊介（本学哲学科助教）

本提題では、「レトリックと哲学」の関係を、学問的方法論のレベルで捉え、弁論術と「論理学（ars logica）」とりわけ弁論術と「弁証術（ars dialectica）」の関係を検討する。アリストテレスは『弁論術』の冒頭で弁論術と弁証術を「呼応関係（ἀντίστροφος）」に置き、両者を、「必然かつ真」なる命題に基づく「証明（ἀπόδειξις）」から区別し、「蓋然的命題」に基づく蓋然的推論として特徴づける。爾来、両者は、歴史的に様々な変遷を遂げつつ、「自由学芸」の枠組みの下で、相互に独立した学科として継承されてゆく。

だが、両者の関係は、ルネサンス期に「革命」とも呼ばれる試みの中で劇的に変化する。そこでは、弁証術が弁論術の理念の下で「弁論術的弁証術（rhetorical dialectic）」として再編され、弁証術が、さらにいえば論理学の全体が、弁論術に「従属」させられる。この革命は、イタリアの人文主義者ヴァッラ（Lorenzo Valla c.1407-57）やアグリコラ（Rudolphus Agricola 1443(4)-85）によって達成されたものだが、この革命の背後にはいかなる理念があったのか。そしてこの革命は、両学科の歴史的展開において、さらにいえば、両者が寄与する学問的方法論にとって、どのような意味を持つことになったのか。本論では、本邦ではほとんど注目されることのなかったこの革命がはらむ一連の問題を、とりわけ以下の論点に即して検討する。

（1）弁証術の定義と、その論理学内部での位置づけの歴史的変遷、（2）当時の論理学の状況と、人文主義者による論理学批判、弁論術の再評価の論拠、（3）弁論術と弁証術の統合の具体的な内実、（4）16世紀中葉以降の継承と批判、（5）17世紀における学問の近代化、特に実験科学における弁論術の再評価。

以上の論点の検討を通じて、最終的には、主に以下の3点が結論として導出されよう。

（1）弁論術的弁証法の核心には、中世論理学の過剰なる形式主義化への批判がある。その主たる批判点は、論理学で使用されるラテン語の野蛮さ（＝人為記号化）、それによる論理学の現実の事物からの乖離にある。その克服のために、自然で美しい古典ラテン語の回復、そしてその粹たるローマの弁論術の下での学問の再興が求められる。この理念の背後には、自然言語こそ真なる事物を反映するとする自然主義的な言語観、さらには論理学の市民化を通じた、学問の市民化の意図も浮かぶ。

（2）歴史的に、弁論術と弁証術を結びつける紐帯には、トピカに基づく「発見術（ars inveniendi）」があり、両者の関係もそれをめぐって多様に変化する。ルネサンスにおける両者の統合も、主として弁論術のトピカが、弁証術のトピカに組み込まれることで実現する。だが、それに伴い、弁論術からトピカが、つまりその「蓋然的推論」としての側面が失われ、その結果、弁論術は「発見」と「配列」を失い、その固有領域は「美辞」と「実演」に限定される。弁論術と弁証術の統合は、逆説的にも、学問的方法論からの弁論術の排除、弁論術の修辞学化にもつながる。

(3)この分離の決定的な契機となったのは、16世紀後半のラムス(Petrus Ramus c.1515-72)による継承だが、弁論術的弁証術は、17世紀における学問の近代化、とりわけ近代合理主義の厳格主義の下で顧みられなくなり、弁論術もいっそう修辞学化する。だがその一方で、近代学問の中でも特に実験科学において、弁論術が、実験における真理の保証形式に決定的に重要な役割を果たすことになる。この形式は特に、ガリレオ裁判を端緒とし、ロンドン王立協会のボイル等の下で確立されてゆくことになる。

本論では、これらの論点を、歴史的に、大きな流れの下で概観することを目指す。

\*

## フランス哲学における「説得術」としてのレトリックの重要性

持地秀紀(本学哲学研究科博士後期課程)

「修辞学」ないし「雄弁術」としてのレトリックは、フランスでは長らく中等教育(コレージュ(中学)～リセ(高校))の最終科目に位置付けられてきた。生徒は最初の3～4年間を通してラテン語文法を学び、次いで古典人文学の教養を身につけ、最後にレトリックを習得する、というのがフランスにおける「人文学課程」のカリキュラムだったのである。しかしながら、19世紀末にレトリックはカリキュラムから姿を消すことになる。古代の弁論家たちの美辞麗句を模倣し、その技術を習得することは、ロマン主義と実証主義が隆盛を向かえた時代にあって、もはや重要な教養とは見做されなくなったからである。こうして、フランスにおいてレトリックは19世紀に衰退した。そして1970年代になると、レトリック復興の気運が高まり、構造主義的な言語論の枠組みからレトリックの重要性が再評価されることになる。以上が、フランスにおけるレトリックの歴史の通説となっている。

ところで、アリストテレスの『弁論術』に遡って言うならば、そこで「レトリック」という言葉で示されていたものは、言葉の美しさや巧みさに関わる「修辞学」や「雄弁術」だけでなく、むしろ、言葉のわかりやすさに関わる技術のことであった。つまり、レトリックとは、弁論家が一般市民を相手に行使する言論活動であり、特定の専門知識を持たない大衆をその知識に通じさせる「説得術」を意味していたのである。このような意味でのレトリックであれば、それは1970年代における復興を待つことなく、伝統的にフランス哲学が保持してきた特徴のひとつを形作ってきたものだったとすることができる。たとえば九鬼周造は1957年にまとめられた講義録のなかで次のように言っている。「フランスの哲学が社会全体を相手にしようと努めていることは、哲学者が自己の思想を社会民衆にわかるような平易な言葉で表現しようとするのでもわかる。ドイツでは哲学者が好んで新しい哲学上の言葉を作り出すために専門の学問者以外には通用しないで哲学というものがある。それに反してフランスの哲学者は新しい思想をも在来の言葉の巧みな組み合わせによって表現しようとするから哲学と社会とが縁を絶たないのである」(九鬼周造『現代フランス哲学講義』、47頁)。

本発表では、レトリックの問題をアリストテレス的な意味での「説得術」の問題として捉えたうえで、それがフランス哲学の中でどのように意義づけられてきたかを考察する。とりわけ、そこにおいてレトリックが「良識」の概念と深く関連付けられていたことを確認したい。以上の考察を通じて、レトリックと哲学の関係を肯定的に捉えるひとつの視座を提示することができるだろう。

## ☆研究発表要旨

### 西谷啓治「空と即」における回互的關係と image の位置づけ

飯塚萌（本学文学研究科博士前期課程）

本発表では、京都学派の哲学者西谷啓治(1900-1990)の晩年の論文「空と即」(1982)における空論を主として扱う。空は西谷の主著『宗教とは何か』(1961)が執筆された時期から晩年に至るまで西谷の思想の中核を成す概念であるとされる。空は、すべてのものが「それぞれのリアルな如実相」においてそれぞれのものとして現成する主客未分の状態の「場」とであるとされ、理性による把握の及び難いところであると考えられている。

「空と即」は、こうした空の問題圏から「根源的な構想力」が初めて主題的に取り上げられた論文であるが、そこでは西谷自身によって構想力が十分に詳論されているとはいえず、研究者による更なる解釈が待たれていると発表者は考えている。松丸(2012)による先行研究では空の場における「もの」と「もの」との相互浸透の関係を指す「回互(えご)的關係」という概念の示す内実が、『宗教とは何か』を執筆した中期と、「空と即」を著した晩年で異なっていると指摘されている。ここで指摘された「回互的關係」の異同をもとにして、「空と即」における「根源的な構想力」の問題から派生してくる image の在り方についても再解釈することができるのではないかと考えられる。したがって本発表では、「根源的な構想力」の問題の所在が開かれる「空と即」における空論の特徴を明らかにすることを通して、空がそこに映されると述べられる image の位置づけを考察することを試みる。

第一章では西谷の空論を概観する。続く第二章では、空の場における回互的關係について「空と即」と、『宗教とは何か』に収録され 1954-1955 年の間に執筆された「宗教とは何か」、「宗教における人格性と非人格性」、「虚無と空」、「空の立場」の四つの論文を比較検討する。そして『宗教とは何か』とそこから二十年余の年月を経て執筆された「空と即」では、回互的關係という語の内実が必ずしも同一ではないと指摘した先の先行研究をふまえたうえで、「空と即」での空論の特徴を浮き彫りにすることを試みる。第三章では第二章で検討された回互的關係をもとに、「空と即」において image に付加された役割とその意義について考察を進めたい。

＊

### ドゥルーズ『感覚の論理学』における「器官なき身体」概念を巡る考察

内藤慧（東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程）

画家フランシス・ベーコンの絵画を論ずるジル・ドゥルーズ『感覚の論理学』は、器官なき身体というドゥルーズ独自の身体概念に関する参照項として、ならびに現象学に対する批判一辺倒とは言い切れないドゥルーズの態度が見出される著作として評価されてきた。器官なき身体はドゥルーズの複数の著作において、その哲学の原理的な位置に据えられた身体概念であり、彼の哲学全体を通じて常に一定以上のプレゼンスが認められている。だが、実際に著作毎の議論を確認するならば、当該概念が必ずしも常に同じ意味内容、同じ機能を与えられてきたわけではない、ということもまた明らかである。本発表は『感覚の論理学』に限定して、その中での器官なき身体概念を分析するものである。

さて『感覚の論理学』に関する上述の2つの評価点は実際には議論の構成上結び付いている。というのも『感覚の論理学』において、絵画に「描かれるもの」としての感覚、およびその「総合的性格」に関する議論の中で、ドゥルーズはメルロ＝ポンティおよびアンリ・マルティネによる芸術と感覚を巡る現象学的考察を引き受けつつ、それに対する応答

として器官なき身体という概念を導入しているのだ。身体の歪形、haptique 概念、「力を描くこと」という絵画の定義といった『感覚の論理学』の様々な論点は器官なき身体を基盤として展開されているが、本発表では、①まず『感覚の論理学』ではどのような手続きを通じて器官なき身体概念が導入されるのか明らかにするべく、上述のドゥルーズと芸術を巡る現象学系の議論の関係を検討する。『感覚の論理学』における器官なき身体概念を理解するためには、そもそもその導入においてドゥルーズと、彼が「現象学的仮説」と呼ぶ感覚理論の間の微妙な関係を考慮しなければ、その意味内容を十分に汲み尽くすことはできないからである。その上で本発表は、②器官なき身体概念の導入を経て、『感覚の論理学』はどのような絵画論、ないし芸術論を展開しているのか、それはどういった美学的プロジェクトを持つと言えるのか、検討する。『感覚の論理学』における器官なき身体は明確に「感覚論」、「絵画論」といった文脈において機能しており、本発表では特にドゥルーズの芸術哲学ないし、芸術の概念を検討する上での器官なき身体概念のプレゼンスを明示することを目指す。

\*

### ヒューム道徳論における規範的心理学

青木眞澄（京都大学文学研究科哲学専修博士後期課程）

ヒュームが主著『人間本性論』において展開する哲学探究には総じて、心理学的性質が認められる。これは、我々の日常的な諸信念を支える基礎を探究し、諸信念の正当化を試みるようなデカルト的基礎付け主義的認識論と対照的であり、諸信念の正当化には踏み込まずに、我々が信念を抱く精神のメカニズムを記述する、という方法論である。すなわち、ヒュームは様々な哲学的課題において、「なぜ」という規範的問題に答えを出さずに、「どのように」という記述的問題意識を貫いているように見える。『人間本性論』第三巻で展開される道徳論においても、ヒュームは道徳的善悪の源泉を理性に帰する合理主義的道徳体系を批判し、快苦といった道徳感情をベースに、コンヴェンションや共感といったメカニズムによって、我々が道徳性を獲得するプロセスを説明しているという点で、心理学的方法論が採用されている。実際、ヒューム自身が本書第三巻の結論において、自らの探究を「対象の諸部分と配置や結合の精確さ」を追求する「解剖学者」に喩え、人々に道徳の実践を啓蒙するような道徳家たる「画家」の仕事とは一線を画することを標榜している。

しかし同時にヒュームはこの箇所でも、「解剖学者」の精確な記述が「画家に助言を与えるのに適して」おり、「実践的な道徳に役立つ」と述べている。つまり、我々の道徳的行為をなすプロセスを精確に説明することが、我々自身が実際に一定の道徳的行為の正しさを是認し、正当化を行うことに役立つ、とここで言われていることになる。なぜ、心理学的説明の徹底が規範的問題への回答に寄与することができるのか。本発表では、ヒュームの道徳論探究の深化の中に、心理学的探究と規範的探究という一見相容れない二つの問題意識のある種の融合が認められることを明らかにすることによって、この問題に答えたい。

発表者は本発表に先立って、ヒューム因果論において存在する心理学的探究と規範的（認識論的）探究との緊張関係の問題に、双方の探究の問題意識の融合を認めることによって、回答を提示した。本発表は、これと同様のアプローチにおいて、ヒューム道徳論においても存在する同種の問題の解決を試みるものである。